

---

# 俺たちのクリスマスは戦場でした

うい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺たちのクリスマスは戦場でした

### 【Nコード】

N7162Y

### 【作者名】

うい

### 【あらすじ】

生まれた時から不幸のどん底とは言えない程度の不幸な人生を送ってきた桜庭琢磨。

彼は、そんな不幸な人生を変えようと、とあるゲームに参加する。――サンタ狩り――。サンタの持つ幸せの袋を手に入れることが目的の単純なゲームだった。彼氏彼女もない寂しい奴らが集まるこのゲームに参加したのだが、ゲームが始まる数日前に、学校一の美少女に告白されてしまう。

「たっくん、付き合ってください！」

幸せになる前から幸せの絶頂を味わってしまい、戸惑う琢磨だが、彼女もゲームに参加すると言い出した。今更参加を取り消すのも気まずくなり、所詮ゲームだからとタ力をくくっていたのが間違이었다……

戦場に幸せは転がっていない(前書き)

2chのサンタ狩りというスレを、自分なりにアレンジしてみました  
もちろんサンタは元ネタ通りにチート性能です

戦場に幸せは転がっていない

ごく平凡、と言えば語弊がある俺、さくらはたくま桜庭琢磨。

今まで、プチ不幸とも言える人生を送ってきた。

財布を落とせば中身を抜き取られて警察に届けられる。

好きな女の子の前で派手に転ぶ。

音楽の授業で、歌のテストで声が出ないなどなど。

不幸のどん底とも言えないのが憎らしい。そんな小さな不幸ばかり起こる人生だった。

そんな俺がいる此処こそ、

「早く撃て！！ 逃すな！！」

戦場だった。

もちろん、サバゲー（サバイバルゲームの略称）なんてチャチなもんじゃあ断じて無い。

本当に人が死ぬし、ものホンの銃弾だって頭上を通り過ぎる。

アサルトライフルのAK-47を構える手が汗でびっしょりと濡れていた。ヌルヌルとした感触が気持ち悪い。

「おい、新人！ ボサツとしてんじゃねえ！！ “幸せ”は分けてやらねえからな！！」

「は、はいっ！」

恐怖で肩を震わせ、グリップを力いっぱい握る。

先端近くに取り付けられた突起（なんて呼ぶのか分からないけど、ゲームとかで主観視点にした時、敵を撃つ目安になる部分）を敵に合わせる。

俺たちが何と戦っているのかって？

「たつくん」

隣でAK-47のマガジンを取り替えている同い年の女の子が、琢磨、つまり俺のあだ名を呼んだ。と言っても、呼んでいるのはこの女の子ぐらいなものだ。

その女の子は、油断すればこんな血が踊り肉が弾ける戦場でも抱きしめたくなるほどの笑顔を浮かべ、こんな人の血が舞い弾丸が刺してくるような危険地帯にしながら呑気な声をあげる。

「頑張つて、“幸せ”を手に入れようね」

ぼお、と顔が火照ってしまった。

いけないいけない。見とれている場合じゃない。とにかく撃たないと。

そういえば、誰と戦っているのか、だったつけ？ それは、背中に大きな袋を背負って、赤い服と帽子を着た――

「くそっ！！ トナカイが邪魔で当たらねえ！！」

白い髭を生やした、と言っても目の前にいるほとんどがそんなの生やしてないけどね。

「くそ、当たらない……ッ！！」

誰でも知っているのに、誰にも信じられていない存在。

「君たちみたいな者達に、“幸せ”は勿体無い」

―――サ  
ンタだ  
った。

戦場に幸せは転がっていない(後書き)

クリスマスにはまだ早い？

知らん！！

リア充爆発しろ！！



## 学校に昔夢見た青春はない

ことの発端は数日前の出来事だった。

クリスマスも間近に迎えた十二月某日。

「はあ……」

授業の合間の休み時間。桜庭琢磨はヘッドホンで音楽を聞き、机に伏せていた。

聞いているのは、最近ハマった歌手の『Dear・X・mas』と呼ばれる三人グループの曲だった。単調なリズムが心を落ち着かせてくれて、一人でいても寂しさを感じさせない。

まるで自分のためにあるような曲だった。

桜庭琢磨は休み時間も一人だ。だが、決して友達がいらないわけではない。表面的な付き合いの友達ならクラスの男子全員が当てはまるほどだ。

なら、なぜこんな状況なのかと言えば答えは二つ。

一つは、固定のグループに属していないからだ。八方美人の人付き合いをしていたら、いつの間にか“ぼっち予備軍”になっていた。

二つは、自ら話しかけない人間だからだ。自分から話しかけることで相手が嫌な思いをするんじゃないか、と内心で恐がってしまっている。だから、相手から話しかけられることで、たとえ嫌われても相手が悪いんだと責任転嫁できる。

人と関わるのが怖い人間だった。

もともと備わっている不幸と相まって、相乗効果でも生み出しているのかと思うほど話す相手がいない。

「んー」

曲が変わる境目でチャイムが鳴った。ヘッドホンをカバンに放り投げ、曲をとめる。

これが、桜庭琢磨という男の高校生活である。

放課後になると、やはりというか当然と言うか一人ぼっちだ。

帰宅部員なので帰る時間は早い。どこかしらの部活に入ろうかと思うが、こんな時期に入って居心地の良い部活が思いつかない。

なので、今日も駅までの道をとぼとぼ歩いていると、とある女の子の後ろ姿が見えた。

「きたがわ とつこ北川冬子……か？」

髪は肩で切りそろえられ、スラリとした体付きが後ろから見ても分かる。そしてその正体は、学校一とも言われるほどの美少女だった。

その冬子は一瞬、こちらを振り返った。すぐに顔を前に戻したが、視線が合った。

ドキツとする。

ここだけの話だが、冬子と琢磨は幼い時、隣人で、同じ日に生まれたらしい。小学三年生まで一緒に遊んでいたのはおぼろげだが覚えていいる。しかし、男女間の変な対抗意識に巻き込まれ、そのまま離れて、遊ばなくなり、次第に忘れてしまっていた。

この学校に来るまでは、だ。

すごい美少女がいるぞ、と友達に誘われ着いて行けば、どこかで見知った顔だった。それが冬子と気づくのは更に数日後になるわけだが。

「あいつの記憶から、俺は消えちまってんだろっな」

そう口に出すと、虚しさが心を撫でた。ちょっと寂しい。声をかけるなんて大それたことはせず、そのまま自宅へと直行した。

……。

家に帰れば、やることも無いのでネットサーフィンが始まる。テレビやネットで話題のワードを打ち込む。

今検索しているのは、クリスマスだ。気が早いと思うが、周りはずでにクリスマスの話題一色。他に調べることもないので、検索を開始した。

「クリスマス、プレゼント、彼女、彼氏……」

検索結果で出てきたワードを読み上げる。どれもこれも華々しいワードばかりだ。

……だんだん腹が立ってきた。  
なにが彼女だ彼氏だ。クリスマスごときで浮かれやがって。

「なんだこのリア充履歴は、死ねばいいのに!!」

ぶつけどころのない怒りを声に任せて叫んだ。叫んだと同時に悲しくなった。

肩を落とし、違うワードで検索しようとする、画面の端に手紙のアイコンが付いた。メールを着信したマークだろう。

そこにカーソルを動かし、中を開く。差出人はオンラインゲーム

で知り合った友人だった。

そのオンラインゲームとは、敵味方に分かれて撃ち合う、疑似戦争を体感できるというもの。ネットで大人気のオンラインゲームの一つだ。

文面をまじまじと見つめる。

差出人「ケーブル」

よう、マーク

最近調子がいいな！

同じチームメイトとして鼻が高いよ

まあ、前置きはこれぐらいにして、ちょっと話があるんだ

近々、オフ会を開こうと思っているんだが、そのついでに面白いイベントも見つけたんだ

その名もサンタ狩り

サンタを狩ると幸せが手に入るとかいうふざけたゲームなんだけど、リアルなサバゲーみたいなものらしいんだ

クリスマスイブの前日から三日間なんだけど、暇？

どうだ？ 参加してくれないか？

嬉しい相談だった。

今の生活は、まるで全力で振り続けた炭酸飲料のように刺激が無い。さすがに舌が痛くなるほどの刺激はお断りしたいが。

なら、だ。オフ会に参加して有意義なクリスマスを過ごしてやるう。

毎年のように一人寂しく眠る生活はこりこりだ。

バイトで稼いだ金もたんまりと残っているし、三日間ぐらいの寝泊まりはできる。

それに、幸せという言葉にも惹かれた。プチ不幸な自分の慰めぐらいにはなるだろう。

もしかしたら、本当に幸せになるかも。などと淡い期待をしている。

そうと決まれば行動だ。すぐさま返事を書く。

誘いありがとうなケーブル

もち参加するぜ！

会えるのが楽しみだよ

なんか、英文を訳したみたいなお文章になってしまったなあ。

違和感は大して感じないのでそのまま送信した。

返信はすぐに来た。

マジかよ！

そりゃ良かった

他のメンバーも来るらしいから、こりやお祭りかもな

集合場所なんかは次のメールに載せとくわ

「っしあ！ オフ会ー！」

小躍りしながら部屋を回ってしまっほど嬉しかった。

ネット充（ネットで充実している人）ゆえの性が、こういう話は何で舞い込んでこない。

友達の少ない琢磨にとって、生きてきた中で五本の指に入るほどのビッグイベントだ。

次に連続してメールが届いた。ケーブルの書いていた文章通り、中身は集合場所の地図が貼ってあった。その内容を携帯に送り、保存する。

普通なら、ここで悪い人に誘拐されるなどのリスクも考えるべきなのだが、浮かれたままヘラヘラと笑う琢磨は愉快に小躍りするだけだった。

「オッフ会、オッフ会、うれしいなー」

ついには歌いだしてしまった。

これだけ上がった琢磨のテンションを下げるイベントは、その次の日に起きる。

……。

いつものように、いつもと変わらず、至って普通に登校している桜庭琢磨。

だが、今日の彼は違った。

「ふっふふーん」

軽くスキップをしながら満面の笑顔だったのだ。  
校門の前に立つ先生が挨拶してきた。

「おはよ」

「おっはよーございまーすっ！」

先生の声を遮り、大声で叫んだ。他に登校している生徒の視線が

突き刺さるが、まるで何も感じていない琢磨は、そのまま教室へとスキップしながら歩いていくのだった。

「はあ……」

そんな一大イベントがあつたとしても、学校での琢磨は相変わらずの一人ぼっちだった。

ヘッドホンを両耳にあて、うつぶせ寝をしていた。ふいに、肩を叩かれた。

「んあ？」

「お呼びだぞ」

肩を叩いたのは友達たなへよしやの田辺ヨシヤだった。その顔は引きつっており、なんだか気まずささえ感じられる。

何事かと思い、教室の出入り口をチラッと見る。

「……えっ？」

北川冬子だった。

視線が合うと、冬子は朗らかな笑顔をこちらに向けてきた。心臓がハイスピードでビートを奏で始める。

ヨシヤが耳に口を近づけてきて、小声で話してきた。

「なあ、お前。冬子さんに何かしたのか？」

「するわけないだろ」

「それもそうか」

そう言うと、ヨシヤは琢磨から離れ、いつものグループに混ざっ

て談笑を始めた。

多少恨めしく思いながらも、頭を切り替えて冬子へと歩み寄る。正面に立つと、余計に可愛く見えた。鼻や目、顔立ちが全て完璧だし、非のつけどころが無い。

開口一番は琢磨が取る。

「なにか、用ですか？」

「久しぶりだね、たつくん」

教室中の視線が自分たちに集まった。

……コイツら、聞いてないフリしてコッソリ聞き耳たててやがったな。

ちなみに、たつくんというのは小学生の時の琢磨のあだ名だ。妙な懐かしさがこそばゆい。

しかし、教室中から集まる視線がさすがに辛くなり、冬子の手を引っ張って廊下に行く。

そのまま誰もいない場所まで連れて行く。

「……で、久しぶり、って？」

「うん、小学校以来だったからね」

えへへ、と笑う顔にいちいちドキドキしてしまう。

いくら幼い時の友達とはいえ、こんな美少女と親しく話してしまつていいのか、と疑問に思う。カッコイイわけでも、コミュニケーションを取る力があるわけでもない自分が。

「だからね、たつくんに言いたいことがあるんだ」

「脈絡が分からないけど……」

だから、という言葉の間違って使った冬子にツッコまざるおえな



かった。

その返事がおかしかったのか、口に手を軽くあてて、おしとやかに笑う。

「そうだね。じゃあ、直球で言うね」  
「う、うん」

冬子の声のトーンが落ちたことで、体が強張ってしまった。唾を飲み込むものにも心なしか精一杯の力が必要だった。

上目遣いでこちらをじっと見据えてきた。  
その潤んだ唇が、そつと動く。

「たつくん、付き合ってください！」

時が止まった。

多分、こんな感覚のまま時間が進んでいるんだとしたら、今頃よだれを垂らして、ボーっとしたバカみたいな顔の奴が冬子の前に立っていると思う。

幸いにも自分の体内時計がスローモーションで時を刻んでくれたおかげで、よだれを垂らすバカは現れなかった。

それにしても、今冬子はなんて言った？

「付き合ってください」

もう一度聞こえた。

付き合ってください？ 突き合ってください？

ああ、剣道のことが、と思考が停止したとは思えない結論に至ってしまった。

「悪いけど、俺剣道の経験無いんだよね」  
「へ？」

今度は冬子の時が止まった。  
あれ、おかしかった？

「突き合ってください、って剣道のことじゃないの？」  
「ええっ、どうしてそうなるの!？」

「いや、突き合って、って」

「ああ。もう、違うよ、たっくん。付き合って、っていうのは、  
交際してほしいってことだよ」

頬を膨らませて怒る冬子可愛いなくへへ。

おっと危ない危ない。もう少しで完全に頭が飛ぶかと思った。

「交際、俺と冬子が……、交際つつっ!？」  
「はい！」

冬子の喜嬉とした声と同時に、どこにそんなに隠れていたのか分から  
ないほどの数の男子生徒が、そこら中から飛び出し、襲いかか  
ってきた。

「「「「桜庭琢磨の裏切り者おおお!!!」」」」

「う、うわあああああああああああ!!!」

視界が真っ暗になる頃には、すでに俺の意識は無くなっていたの  
だった。

## 非リア充の俺にメールテクはない

目を開けて見えた物は、一面の白い壁に、黒い穴が平均的な距離を保って空けられていた。

背中を伝うふかふかとした感触から察するに、俺は今布団かベッドに寝かされており、見えているのは天井で、つまり今の今まで気絶していたことになるわけだ。

なにが言いたいか、ズバリ言うつと。

「……、どっ？」

ボソツと呟く。

右横でバタバタと足音が聞こえ、視界に天井とは違う物が移った。北川冬子の心配した顔だった。

その顔は、さながら飼い犬が風邪をひいて、処置も対応も分からず慌てているみたいだった。真冬だというのに、その顔には一筋の汗が見える。

「大丈夫だった？」

冬子が口を開いた。

大丈夫だった？　と言われれば、どこも痛まない体を診て言おう。

「大丈夫……」

思ったよりも声がざらついていた。無理やり作った笑顔も不自然な出来だ。

そんな様子が無理をしているように見えたのか、冬子は腕や肩を掴んで揺さぶってきた。

「ねえ、ほんと？ 無理してない？」

「大丈夫……だって」

起きたばかりで本調子じゃないだけだ。

そんな言葉をカッコ良く言ってると思った矢先、冬子は安心してきった顔で「ほっ」と声を出した。

「良かったぁ……」

あんなことになった原因はお前にあるだろ、と一言文句を付けたくなったが、ここまで心配してくれた女の子に真顔で言えるほど根性は腐っていない。

むくつと上半身を起こ上がらせて、足をベッドから下ろし、冬子と向かい合う形になる。

どうして冬子は、俺なんかを好きになったんだろう？

罰ゲームか、興味本位か、次の彼氏までのツナギか、本当に好きなのか。

「怪我が無くて良かった、たつくん」

なぜ小学生で終わった関係が、ここで結びつく？

疑問しか浮かばない。浮かべない。ポジティブに考えるほどワケが分からなくなる。

あの笑顔が、無垢な笑顔が嘘のように思えてきた。

「なあ」

「ん？」

無意識に声が出た。

「なんで俺なんか告白したんだ？」

言った。

まだ付き合っているわけでもない。これじゃあ断る風に聞こえてしまう。

そんな嫌みな質問に、冬子は朗らかな笑顔を浮かべた。

「好きだからだよ」

それだけか？

疑心暗鬼というのは、こういう感じなのだろう。

本当に、本当に、何度も言うが本当に、俺は運動も勉強もお金も顔も良くない人間だ。もしかしたら、性格もヒドいかも知れない。いや、告白してくれた女の子にあんなヒドいことを言える時点で、優しい性格とは言えないだろう。

目の前の、まるで女神のように無垢で、天使のような女の子は、薄汚い心の俺にソツと手を差し伸べた。

「行こつ。午後の授業、始まるよ？」

疑うのがバカバカしくなった。

そうだ。こんな俺にもモテ期が来たんだと思えばいい。一生分の、いや来世もまとめたようなモテ期が。

来世の俺には悪いが、今世は俺の一人勝ちだ。こんな美少女と付き合えるんだぜ？ 勝ち組さ。

勝ち組の階段をジェット機で上がっていくような浮かれたテンションのまま、部屋を出る。

「そうだ」

まだ言っていなかったことがあった。

「ん？ なに？」

「さっきの返事、オーケーな」

素っ気なく、別に興味ないような言い方で言ってみた。  
そんな返事に、冬子はクスツと笑い、

「ありがとう」

ホモでも女好きに変えてしまっんじゃないか、と思えるほどの絶世の笑顔をくれた。

もちろん、午後の授業はちょっとした地獄だった。

クラスメートのほぼ全員がこちらをチラチラと見てはコソコソと話している。

なんなんだ。そんなに俺が学校一の美少女と付き合うのが不満か。ふん、確かに俺は取り柄も無い奴だが、人にはモテ期という物があるってだな……。

と、無性に教壇に立ち、クラスメートの前で説教したくなった。でも、そんな度胸はどこにもないし、余計にこじれるだけだから放っておく。そうしておけば悪化はしないのだ。

ホームルームが終わったあと、俺が北川冬子をレイプし、性奴隷にし、無理やり告白させているという実もふたも無い噂がクラス中に広がった。

……どうしてこうなった。

……。

「どうしたもんかねえ……」

無論、冬子の話でもあるが、彼女が出来たという幸せを噛みしめている最中の俺に、幸せを掴もうぜ！ などという非現実的な話を持ち込んできたケーブルに、なんて言おうか迷っているところだ。断るのも気まずい。同じメンバーだし、一番中の良い相手だからだ。

なら行くか？ いやいや、彼女を置いて、クリスマスにゲームのオフ会をしている彼氏がどこにいるだろうか。

ならどうする？

「とりあえずまあ、冬子に聞いてみるかな」

休み時間の間に交換していた、携帯の中のメアドと電話番号を探す。

北川冬子。あった。ここは、迷惑じゃないようにメールをする。

こんばんは

さっそくメールしてみたよ

いきなりでごめんだけど、クリスマスとかってどうするの？

こんなもんだろ、と送信ボタンを押す。送ってから色々考えてし

まった。これ素っ気ないんじゃない？とか、顔文字入れた方が良かったかな？とか。

そんな不安をよそに、二、三分経ってからメールが返ってきた。

ありがとうー

クリスマス？ もちろん、たつくんと一緒にいるよ（笑）

やっぱりそう来るか。

俺だって同じ気持ちだが、先客をむざむざ切り捨てるのも気分が悪い。

まずは頼んでみるか。

実はクリスマスに、ゲームのオフ会に誘われてるんだけど一緒に行く？

送信。

……っておい！

「オフ会ってなんだよ！ そんな言葉、アイツが知ってるって限らないじゃねえか！」

ケーブルとメールしている時の感覚で返してしまった。  
そもそも、なんで彼女連れてオフ会だよ！

「ああ、なんて言おう……」



背筋に氷水でも垂らされたような悪寒が駆け抜ける。冷や汗が止まらない。

慌てるな慌てるな。ここで慌てちゃいけない。ドイツ軍人はうろたえない。

メールの着信音が鳴った。驚き、肩が跳ねる。  
メールを恐る恐る開いた。

オフ会って、『コーリング アウト アザー』？  
たっくんの大好きなゲームだね  
いいよ！一緒にここ

え、なんで知ってたんだよ。  
ちよつと呆然としてみると、また着信音が響いた。

驚かせちゃったかな  
寝言で言ってたからそうなのかな、と思って（汗  
気にしないで！

寝ている時までゲームのこと考えてるって、もはや俺は病気なんじゃないか？

っていうか、寝言で『コーリング アウト アザー』って言えた自分に何より驚いた。

もやもやが拭い去れたわけじゃないが、冬子は信用することにする。着いてきてくれるならそれでいいじゃないか。

日時と集合時間を添え、『そうなの？ んじゃ、楽しみにしてるね』とだけ送った。

『うん！ おやすみ』という短文が送られてきたのを見届け、携帯を閉じた。

ケーブルには、なんて言おうか。友達と言っておこう。今はそれぐらいしか思いつかない。

両方を取るって、けっこう残酷な選択してしまったかな。

こうして、まるでリーマンが電車の乗り換えをするかのように、俺の運命もまた、違うルートに乗りかかったのだった。

神様がいるんなら心から感謝するね。まあ、幸せを与える人選を完全に間違えたわけだが。

非リア充の俺にメールテクはない（後書き）

メール文の書き方ってこんなでいいのかな？

伝説の名勇は笑わない（前書き）

主人公最強は当分先

## 伝説の名勇は笑わない

なんだかんだで冬休みになった。

終業式が終わるまで、殺し屋ヒットマンを名乗る男子生徒を返り討ちにした  
りしたのは、また別の話。

まさか、たった一言で学園生活が凄惨なことになるとは予想だに  
しなかった。

冬子を少々は恨めしく思うが、男子生徒たちは俺のことを羨まし  
く思っているんだと思うと、嫌な気はしなかった。

勝ち組。

なんて甘美な響きだろう。

「うん、今なら言えるぞ。すばらしきこの世界！」

鼻歌を吹かしながらクローゼットを開ける。

何を隠そう今日はクリスマススイブ前日であり、待ちに待ったオフ  
会の日だ。オフ会と言っても、サバゲー会場とホテルを往復するだ  
けの予定らしい。

冬子のことは友達なりなんなりでごまかそう。

「さあて、準備も出来たしい」

服をささつと着替え終わり、カバンを担ぐ。

玄関まで階段を駆け下りる。

「あだっ！！」

自分で自分の足を踏み、そのまま下まで落ちる。不幸中の幸いに  
も段が低かったため、大きな怪我はない。

「いてて。はあ……、なんか、テンションがガクツと下がった」

先ほどの浮かれ具合が嘘のように肩を落とす。

痛めた足に気を使いつつ靴を履き、扉を勢いよく開けた。

……。

現地集合と言われていたが、冬子とは最寄りの駅前で会った。俺より早く来て待ってくれてる辺り、面倒見も良さそうだ。

次に、彼女の私服姿を見て、顔が火照った。派手でテカテカした服でもなく、質素で地味でもなく、ごくごく普通の服装なのだが、まるでファッション誌に出てくる有名ブランドのように見える。

冬子が俺に手を振った。

「たっくん」

駆け寄る。

「ごめん、待った？」

「うっん。今来たところ」

本物の彼氏彼女のような会話をしたことに、つい笑みがこぼれた。と言うが、本当に彼氏彼女だ。

実感が無く、無性にむずがゆい感覚に襲われる。

冬子も、さっきの二割増しぐらいの笑顔を浮かべる。

「じゃ、行こっか」

「ああ」

返事をし、肩を並べて歩く。  
横から顔を見るが、やはり可愛い。自分にはもったいないぐらいに。

オフ会の集合場所と思われる公園に着いた。

公園と言っても、小さなカフェが数件経営している大きな公園だ。  
こじやれたテーブルやイスも見渡す限りに並べられている。

そのなかの一角に目立つ集団を見つけた。

地図の集合場所と合う。

恐る恐る、近づいて行った。

「ん？」

金髪の女の子がこちらを振り向いた。

驚き、肩が跳ねた。見るからに外国人だが、幼さも残っていて、  
なんというか、めちゃくちゃ可愛い。

その女の子はこちらを見るなり早足で寄ってきて、こう尋ねた。

「チーム？」

口調は、アニメなどで見るなまった日本語ではなかった。

先ほどの驚きのせいで声が詰まった俺は、首を縦に振った。

「アカウント名は？」

「ま、マーク……」

「マーク!？」

俺の返答を聞いた途端、金髪の女の子が抱きついてきた。ふくよかな胸がガンガンと当たっていて、ドキドキが止まらない。

その金髪の女の子は俺の右頬に軽くキスをすると、碧い瞳で真っ直ぐとこちらを見つめてきた。

「僕だよ僕！ ケーブルさ！」

「け、けけケーブル！？」

ケーブルと名乗る女の子は嬉しさを体で表現し、きゃっきゃと跳ねていた。そのたびに大きな胸が揺れる。

予想外だった。が、確かにケーブルの一人称は“僕”だ。口調もそことなく似ている。

その外国人のケーブルは不思議そうな表情を、俺の隣に向けた。

「こちらさんは？」

冬子のことだろう。

ここは先手を打っておく。

「ああ、コイツは友だ「彼女です」

俺の言葉に冬子がかぶせてきた。視界の向こうの集まりがざわつき始める。

「へえ、マークって彼女いたんだね」

「ん、ああ、なんかごめん」

「いや、いいんだ。別に悪いわけじゃないしね」

一瞬、寂しげな顔が垣間見えたかと思えば、すぐに笑顔に変わった。



想定していたことよりもアツサリと受け入れてくれたようで、なんだか拍子抜けだ。

山の気候のような突然の変化に戸惑っていると、ケーブルは俺の手を引っ張ってきた。

そのまま引き寄せられ、腕を組む形になる。

「いこう、マーク！」

もふもふとした胸の感触を味わう。腕から伝わる豊満な胸の感触は、ちよつとした極楽だった。

ハツと我に戻る。冬子に振り向くと、相変わらずのニコニコ笑顔だった。彼氏が他の女の子に腕組みされてるのを見て、コイツは何も思わないんだろうか。

そんなことは無いはずだ。と思いたい。

「みんな集まってるよ」

連れられた先には、結構な数の男女がごった返していた。指折り数えて三十人ほどだろうか。

ただ、だいたい女の子同士が雑談しているだけで、男共は黙ったまま携帯ゲーム機をいじる物がほとんどだった。していなかったとしても、ボーっとしてるだけ。

思っていたオフ会と、何か違う。

想像していたのは、男女が楽しく会話していて、コスプレする馬鹿とかいて、大騒ぎしているんだと思っていた。

「これで全員？」

ケーブルに質問する。

「うん、全員。君らで最後さ」

短かな返事が来た。

正直、メンバーなんてほとんど記憶していない。覚えているのはリーダーと副リーダー、それにケーブルくらいなものだ。

「そろそろ動こうか、みんな」

男が一人、立ち上がった。

それが合図だったのか、そろそろと席を立ち始める。

見たところ、あの男がリーダーらしい。かなり背の高い人で、顔もなかなかのイケメンだった。

「あの人がリーダーかな？」

「いや、前のリーダーだね。そして、その正体はその昔、暫定一位を独占し続けてきた伝説の傭兵、オンリーアタッカー孤立無援ケーブル」

彼がケーブルか。

チームを立ち上げた途端に姿を消したが、全盛期は「足音を鳴らすだけで殺される」とまで恐れられた名勇。

仲間の支援を受けずにしたキルストリーク（死ぬまでに殺した相手の数）が40を超えたとかいう、チートプレイを疑われるほどの腕前。

「ケーブル」

ケーブルが声をあげた。

「会場までの案内を頼めるか？」

「あ、はい！」

頼みを聞いたケーブルはすぐに地図を表示し、目的地を指差す。

「ここからすぐですね。行きましょう」

そう言って、ケーブルが先頭をきって歩き出した。  
遅れないように背中を追う。

「近いのか」

「そうみたいだね」

動きづらいと思っていたら、いつの間にか冬子に腕組みされていた。

やはり焼き餅はしてくれたんだな、と感動してしまう。

見慣れない街をキヨロキヨロしていると、ケージがこちらを見ていた。視線が合うとそっぽを向いたが、またすぐにこちらを見る。  
なんだ？ 何が言いたいんだ？

「あの、何か？」

「ん、いや、君たちが羨ましくてね。すまない」

案外、素直な人らしい。確かに、美少女と腕を組んで歩ける奴を見て羨ましく思うのは当然だと思っ

でも、何か引つかかる。

「そうなんですか？」

「……」

「違いました？」

「いや、話そうか迷ったんだ。楽しいオフ会で気を重くされても困るからね。言うのは止めておくよ」

「そうですか」

それからまた、無言で歩く。冬子も腕を組むだけで話しかけて来ない。

自分から話しかけるのをヨシとしない自分が、どついつ風に話しかけようか小さな脳みそをフル回転させていると。

「ねえ、たつくん」

冬子が先に話しかけてきた。

「なに？」

「たつくんって、運命って信じる？」

「運命？」

「うん。運命。人が産まれて死ぬまでの予定表があるんだとしたら、信じる？」

「難しい質問だな……」

先手を取られたことは嬉しいが、なんて返答すればいいのか分からない質問だった。

しかし、恋人同士の会話にきこえなくもない。

「運命ねえ。信じたくないな」

「どうして？」

「んー。決まっているんだとしたら、なんだか生きることの意味が分からなくなる」

「それも運命なら？」

「う、ううん……」

「もしも、奇跡で運命を変えられるとしたら、奇跡って必要かな？」

「……、必要なんじゃないか？ たとえその奇跡さえも運命だとし

ても、俺は必要だと思う」

「どうして？」

「いや、どうしてって言われてもなあ……」

自分でも、なぜこんなことを口走ったのか分からない。

いや、そもそもだ。なぜ冬子はこんな話題を持ち出したんだ。宗教が何かの勧誘だろうか。

電波な質問で、頭の中が洗濯機の中のようにグルグルと渦巻いている。

考えるフリをしながら、ケーブルの地図と格闘している姿を見る。そのケーブルが嬉しそうな声をあげた。

「ありましたありました！」

指差す方向を見ると、古びたゲーム屋があるだけだった。本当にここなんだろうか。

「なあ、本当にここなのか？」

「うん、間違いないよ。さっそく中に入ろう」

ケーブルは俺の心配もよそにずかずかと店内に入ってしまった。

「はあ。さすが我らの“切り込み隊長”」

彼女のチーム間の二つ名を、ボソツと呟いた。

伝説の名勇は笑わない（後書き）

感想や質問などあれば、お待ちしております

俺がこんなにモテるわけがない

先に入ったケーブルの話だと、サンタ狩りが始まるのは晩頃らしい。それまで、自由時間なるものを頂いた。

と言つても、やることが無い。来たことは無いが、どれも見知った店ばかりで景觀に新鮮さのかけらもありはしなかった。

「どうすっかなあ」

灰色の雲で淀んだ空を見上げながら呟く。  
すると、横にいた冬子が顔ののぞかせてきた。

「ねえ、暇ならそこらへんブラブラしない？」  
「えー」

冬子の誘いでも、あんまり気の乗らない誘いだっただ。  
さつきも書いたが、この辺りには新鮮さが無い。住んでいる町と似ているし、お店だって似たようなところだ。

「めんどい」  
「そう？　じゃあ」

冬子は笑顔を浮かべ、

「セックス  
性交しよっか」  
「は？」

とんでもないことをさらっと言った。  
疑問で返すが、何も理解出来ないわけじゃない。

ただ、あまりにも唐突すぎたのと、じゃあ性交という気軽さが分  
からなかったのだ。

最近の女子高生はビッチだと聞くが、ここまでなのだろうか。  
さも清純そうな容姿をした冬子ですらこんなことを言うなんて。

「しないの？」

上目遣いで覗き込まれる。

確かにしてみたいさ。思春期だからな。こんな美少女とヤれるな  
ら魔法使いなんてならなくていい。

俺が返答に困っていると、冬子が右頬に人差し指を当て、左右非  
対称な顔をした。左目を閉じ、口の右端を吊り上げた奇妙な顔だ。

「場所とか気になる？　なら、近くにラブホテルあるし、お金もあ  
るから大丈夫だよ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな……」

付き合って一カ月も経たない仲だぞ？　小学校で遊んでた程度の  
交友関係だぞ？

つか、昼間だし。

俺の中で、理性と名乗るヒーローが欲望という名の悪党をこらし  
めている。

「ふふ、小学生の時は積極的だったのにね。ファーストキスだって、  
たっくんに奪われたのに」

「そうだったっけ？」

「舌だっ入れてきたし」。胸も触られたよ」

「う、嘘だろ！？」

「ふふ、ジョーダンだよ」



ジョーダンで良かった。

小さな時から変態なのかと心配した。

「だから、ファーストキスの時みたいに、今度も私の初めてを貰ってね」

恥ずかしげもなく、よく堂々と言えるなあと内心で感心していた。初めて、か。

「冬子は俺以外に付き合った奴っている？」

「いないよ。たっくん一筋だもん」

「一筋？ もしかして、小学生の時からか？」

「うんっ！」

そこまで惚れられてるんだ、と知ると照れてしまう。

でも、当の本人である俺はそこまでの感情を持ち合わせていない。俺の冬子に対する好きは愛してるという意味じゃない。可愛いからとか、綺麗だとか、そういう外面的な意味でのものだ。

ゆえに、性的な意味でしか見ていない。

長年の願いが叶い、俺と付き合えた冬子だが、まだ片思いのままなのだ。

自分で自分が許せない。冬子の気持ちにそえない自分が。

「で、する？ しない？」

「冬子はしたいのか？」

「したいよ、たっくんと」

「俺も……したいけど……」

理性が押されている。頑張れ俺の理性。

「したい……けど……」

「じゃあ行こっ!」

「うっ、うん」

——理性さんがログアウトしました。

「どこに行くの?」

その声と同時に腕を組まれた。さっき感じた柔らかい感覚がよみがえる。

顔を向けると、ケーブルだった。

「け、ケーブル!?!」

「やん。ケーブルじゃなくて、僕の名前はアリスだよ?」

「はえ? あ、アリス?」

おとぎ話かよ、とツツコミたい。

だが似合わない名前でもない。あんなヒラヒラのスカートがついた服なんか着ると、とても似合いそうな容姿だ。

今のアリスの格好は、編みセーターにジーパンという男っぽい格好だ、

「ね、マーク。着いて行ってもいい?」

アリスは頭を俺の肩に寄せ、猫なで声でねだってきた。  
更に次は冬子がアリスの真似をして頭を肩に乗せる。

「たつくんは私と“二人”だけで行くんだもんねー」

二人、という単語を強調させる言い方だった。

「僕だってマークといたいさ。あ、そう言えばマークの本名教えてよ」

「さ、桜庭琢磨……」

「琢磨だからたつくんなのか。じゃあ僕もたつくんって呼ぶよ」  
「むっ」

冬子が頬を膨らませる。もしかして、頬を膨らませるのは、怒った時の彼女のクセなのだろうか。

「たつくんは私だけが呼ぶもん」

あー、モテモテだな、俺。

来世のモテ期まで使ってるんじゃないかと思ったが、再来世の分まで使ってるなこりゃ。

すまん、来世と再来世の俺よ。存分に堪能させてもらう。

「三人で仲良く行こう、な？」

原因である俺が二人をなだめる。

潔く二人は身を引き、喧嘩を止めた。

「たつくんがそう言うなら、私はいいよ」

「僕も賛成！」

かくして、俺は清純黒髪美少女と、金髪壁眼巨人美少女の二人に挟まれ、ありきたりな町の観光をすることになった。

モテる男はつらいの意味がやっと分かったよ。モテすぎてもしんどいだけだな、こりゃあ。

……。

豪華なホテルのような一室の中、二人の男女がいた。

「今回が本番か」

サンタの衣装を着くずし、胸元のチャックを全開にした筋肉質の男が、ふかふかのソファーに座りながら言った。開かれたチャックの下には、黒いシャツがぴっちり張り付いている。

「どういう風に彼を“覚醒”させるおつもりなのかしら？」

同じくサンタの格好の女が言った。しかし、女の服装はミニスカ  
ートで、白くてスリとした足が大胆に見える格好だった。

男は女のセリフにクスリと笑う。

「すでにあるだろう？」

「はあ？ まさか、大天使様を使うつもりなの？」

「やむを得んだろう」

言葉のわりにはやけに楽しそうな声で男は笑う。

「北川冬子には、犠牲になってもらう」

……。

「疲れた……」

俺は砂漠で水も飲まずにさ迷っている放浪者のようなザラザラ声で言った。

最初こそライバル意識していた冬子とアリスは、町巡りをしているうちに仲良くなっていったのだ。

あまりの元気っぷりに振り回され、へとへとになった。

晩頃になり、アリスの携帯が鳴った。

メールらしく、耳に当てずに画面を見つめていた。

「そろそろ集まれってさ」

そう言い、アリスは携帯を閉じた。

疲れ果てた身に、ゲームをする体力は残っているだろうか。いや、動いている間に膝を着くこと間違いなし。

「たっくん、もうすぐだね」

心なしか、冬子の声が震えていた。

確かに寒くなってきたしな。吐く息も白い。

「うわーん、寒いよ琢磨」

アリスが抱きついてきた。

「ずるいよアリスさん！ たっくん」！

負けじと冬子も抱きつく。

暖かい。暖かいけど、周りの視線が痛い。

美少女二人もはべらせた冴えない高校生なんて構図、ラノベでし

が見たことないな。

三人でゲーム会場の前に行き、点呼が始まる。

全員が揃ったと分かると、リーダーのケージを先頭にして、会場の中に入って行った。

しかし会場と言っても、古びた小さなゲーム屋だ。一列に並ばないといけない。

狭さを我慢しながら奥へ進むと、地下に続く階段があった。更にそれを降りる。

長い階段を降りていくと、開けたところに出た。

「ここは……？」

そこには筒形の巨大なケースと、かなりの量の手袋が置いてあった。

俺がこんなにモテるわけがない（後書き）

モテたいね

彼に必要なのは私じゃない（前書き）

――北川冬子、彼女はとある理由で生を受けた。

――彼女自身はそれを自覚している。

――ゆえに、現実は残酷だったのだ。



彼に必要なのは私じゃない

並べられた手袋の一つを手取る。手の甲には摩訶不思議な模様が描かれ、手のひらには円がある。

妙な感じがする手袋だった。いや、場所と言うべきか。

手袋は床に置かれっぱなしだし、筒型の物以外にこれといった機械もない。

「あん？ 団体様か？」

その言葉で後ろを振り向く。

そこには、別の入り口から顔を出す中年ぐらいの男が立っていた。顎髭は短く揃えられているが雑な感じで、見るからに冴えない。

「あなたは？」

「オレか？ オレはこのゲームの古参さ」

「古参？」

「かれこれ十年近くやってるかな」

そんなに前からある大会なのか、ここは。

どこの広告にも無いし、きっとマニア向けの物なんだろう。

その中年男性が入ってくると、その後ろからぞろぞろとたくさんの人が入ってきた。

自分が言うのもなんだが、モテてないんだなーという感じの顔ぶれだ。どの顔にも覇気や元気のような物が無い。

「さて、何人集まった？」

「ざっと三百人ですか」

遠くでケージとゲーム屋のオヤジが話していた。  
三百人か。思ったより少なく見える。

「残った時は何人かな」

「ゆとり世代で遊び気分の奴らじゃあ、せいぜい保って二日ですな」

そこまで難しいゲームなのか？

「二日で充分だ」

「確かに、今回はちと厳しくなりますからね」

いつもより難易度も高いのか？

初心者揃いの集まりである俺たちは大丈夫なんだろうか。

にしても、ケージの言いぐさからして、ここの経験者みたいだな。  
後でコツでも聞いておこう。

「たっくん」

背中から冬子の声が聞こえた。

「保って二日って……」

振り向くと、おどおどとした顔の冬子がいた。

さっきの二人の会話が聞こえたらしい。たかがゲームでこんなに  
怯えてしまっている。

「大丈夫だって」

「でも……」

慰めても顔色を変えない冬子に、俺は精一杯に優しく言う。

「冬子は、俺が死んでも守るから」

その言葉を言った直後、冬子の肩が跳ねた。驚いた顔のまま固まってしまった。

……。

「保って二日って……」

この戦いは、彼を目覚めさせるための洗礼のようなものだ。そのために、ここにいる。

保って二日。その言葉が、無性に私の胸を搔いた。不安で圧迫される。

彼を死なせるわけにはいかない。

「大丈夫だつて」

優しく語りかけてくる彼の目をまともに直視できない。これからは彼の運命の予定表さえ狂わせた未来だ。

「でも……」

それでも不安を拭えない私に、彼は一瞬困った顔をしたが、すぐに笑顔になる。

そして、優しく言った。

「冬子は、俺が死んでも守るから」

その言葉を聞いた瞬間、胸がざわつき始める。

小学生の時にも彼から聞いた言葉だ。今でも覚えている。あの時も、こんな優しい顔だった。

心臓が高鳴る。

ありきたりな言葉。アニメや漫画の誰もが言うような定型文なはずなのに。

彼の口から出た途端に、心臓が張り裂けそうになった。

私はそんな存在じゃないはずなのに。

こんな感情、持つても意味無いのに。

彼とは、結ばれないのに。

「大丈夫か？」

彼が私の肩を揺さぶる感覚で我に帰った。

でも開いた口はなかなか塞がってくれない。

「おい、冬子？」

彼の暖かな手が、外気で冷えた私の頬に触れる。

暖かい。

「嬉しい……」

つい出てしまった。

「守ってね、たっくん」

本心なはずだ。

この言葉は、私の腹の底から思った言葉なんだ。だけど、言った途端に胸が苦しくなった。

……。

「集まったか」

冬子と話していると、巨大な筒型のケースの前に、軍服の男が立っていた。

その男は、先ほど置いてあった手袋を右手にはめている。

「諸君らは、“幸せ”になりたくて来たのだな？」

最初こそ苦笑しながら見ていたが、その男の言葉に、少しずつ「オー」という声が混じり始めた。

「なら、サンタから奪いとれ。すでに幸せを謳歌する者たちに、更に幸せを与えるような屑共から奪い取り、幸せになろう!!」

だんだん「オー」という声が大きくなっていく。

まるで、一瞬でこの場の全員が洗脳されたかのようにだ。

「幸せを掴みたいなら、欲望に従順であれ！少しでも迷うな！殺すサンタに同情するな！」

これはきつと、狩猟のようなものなのだろう。

サンタはあくまでも狩るべき鹿であり、俺たちは猟師なのだ。

「心の準備が出来た者のみ、その手袋を一つ手にし、この《パンドラ》に乗り込め！」

パンドラ？

不幸や罪悪とかいう負の感情の込められた中、一番奥に希望が入っていたとかいう箱か？

確かに、不幸な者がここに来て、奪い取るという罪悪感乗り越え、希望を手にする、という意味なんだろう。そういうことならバツチリのネーミングだ。

周りが続々と手袋を手にし、《パンドラ》へと入っていく。入った途端にその体が一瞬で消えたのを見てギョツとした。

「わ、私たちも、行こうよ」

「あ、ああ」

俺と冬子も手袋をはめて、《パンドラ》に乗り込む。一瞬、目の前が真っ白になったかと思うと、見慣れた物が正面に現れた。

「地上？」

そう。先ほどの場所の上、つまり地上。景觀に新鮮さが無いなどと俺が酷評していた場所だ。

辺りを見回すと、異質な建物が目に入った。

見るからに教会なのだが、大きなステンドグラスの絵はどれも不気味だった。

悪魔みたいな奴が天使のような奴を串刺しにしている絵。金に溺れた男の絵の隣に、骨に溺れている虚ろな目の男の絵がある。

「ひっ」

隣に立つ冬子が小さく悲鳴をあげた。

顔を見ると、齒が噛み合わないのか、カチカチと齒を鳴らしていた。肩もブルブルと震えている。

その様子を見て、単に寒さに震えているだけじゃないのを知る。

「大丈夫か？」

「だ、だだ大丈夫ぶぶぶ」

大丈夫な気がしない。

顔も青ざめている。

冬子が歩き出したので、俺も横につきそつ。

「全員揃ったようですね」

すでに開かれた教会の扉をくぐると、先ほどとは違う軍服の男が中にいた。

「じゃあ、まずは説明をしましょう。と言っても簡単です。武器を言うだけでオーケー」

そう言つて、男は手袋をはめた右手を上げる。

「MK22」

その声が響くと同時に、手のひらから拳銃が現れる。

「このようになります。まあ、銃の種類が分からない方は、ハンド

ガン、ショットガン、アサルト、ライフルとお呼びください」

音声対応の機械なのか？

いや、その前に、ここはバーチャル世界なのか？ いつの間にか違う世界に飛ばされているし。

バーチャルにしては情景がリアルすぎる。他の人間の顔まで鮮明だぞ。

俺が手足をちらちら見ていると、目の前に立っている男が手をあげた。

軍服の男がその男を指差す。

「質問なんだが、ここはどこなんだ？ いきなり地上に飛ばされる、ってことはここはバーチャルなのか？」

ちょうど俺と同じことを考えている人間だったらしい。

軍服の男はフンと鼻で笑う。

「ここは別次元です」

は？

「正式には、次元で表すことは出来ません。ここは現実であって現実ではない。極めて現実に近い他次元空間なのです」

聞いたこともないワードだ。他次元空間？ 極めて現実に近い？ つまり、ここは俺たちのいた現実じゃない？

周りがざわつき始めた。

「落ち着いてください。これはゲームなのです。お帰りの際は先ほど入ってきた時のように速やかに戻れます」



その軍服の男は言葉のあとに「しかし……」と付け加えた。

「三日間、この世界から出られません」

なんだって？

俺は軍服の男から目を離せないでいた。  
血の気の多い奴らが騒ぎだす。

「ふざけんな！」

「俺なんかホテルとつたんだぞ！」

「わたしの寝るとこはどうなんのよ！」

「なんとか言えや！！」

罵詈雑言が飛び交う。

だが、そんな喧騒も、すぐに治まる。

「うるさいですねえ」

軍服の男が取り出した拳銃で、男の近くの人間の頭を吹き飛ばしたからだ。

びちゃびちゃという気持ちの悪い音がよく聞こえた。  
また騒ぐが、男が銃口を向けると、ピタッと止まる。

「それで良いのです」

男はニヤリと笑う。

「欲望こそが、この世界の、あなたたちの力になります。じゃないと、サンタ共に、先ほどこのわたくしが撃ち抜いた人間のようにさせられますよ」

恐怖で体が固まった。

「ふーん。そろそろ時間ですね。皆さん、心配はいりませんよ。サンタの持つ幸せの袋さえ手に入られれば良いのです。そしてここに逃げれば、サンタ共はあなたたちを追ってきません」

そついう問題なのか？

こんな簡単に人が死ぬところで三日間も生き延びると言うのか？  
これじゃ、幸せの袋を手に入れるどころじゃない。

「サバイバルゲーム……。本物のサバイバルゲームじゃないか……！」

彼に必要なのは私じゃない（後書き）

聖母マリアは、キリストを処女のまま身ごもったという。

うん、ただそれだけ。

めっちゃくちゃ痛いんだろうな、と思っただけ。

ここはお前たちの知る現実じゃない（前書き）

天使か悪魔？

宗教か何か？

いや、違うね。

宗教なんて小さな物じゃ表せないんだ。

そう、これは天使と悪魔の戦争。

ここはお前たちの知る現実じゃない

一瞬の、壮絶な光景がこれから起こる未来を勝手に連想させる。  
死ぬ。

間違いなく、死ぬ。人が死んでいく。  
不安感が胸の底から込み上げてくる。

「あ……が……」

息を吸うたびに喉からイカレた音が鳴る。何かが詰まってしまっているかのようだった。

辺りは水を打ったように静まり返ったが、そのほとんどが恐怖で肩を震わせている。

「主催者さんよお」

一人の男が恐怖にも震えず、呑気な声をあげた。

「さっさと始めてくれねえか？ あと、その死体も生き返らせてさ」

何を言ってるのか、琢磨には理解できない。  
生き返らせる？

「それもそうですね」

主催者と呼ばれた軍服の男は頷いた。

「じゃあ、そろそろいいでしょうね」

その主催者の指が鳴る。

と同時に死体に、まるで動画を巻き戻したような動きで散らばった肉片がくつついていく。

死体には、碎けた跡も残らなくなった。

「あ、あれ……」

その死体が声を発した。

あまりにも気味の悪い物を見て皆の悲鳴が響く。

「さてさて、これで心配はいらないでしょう？　恐怖なんていらないんです。欲望だけを持てばいい」

手品？　マジック？

いや、そんな物には見えなかった。

明らかな、異世界の力。

「いつもいつも同じネタばっかで飽きたぜ。次は胴体切断にでもしてくれよ」

「ふふ、いいですよ。そっちも面白そうだ。来年も来てくれるのなら、見せてあげますよ」

「どうだね。来年に来るかどうか……」

「十年も生き延びたゴキブリのような方が何を……」

十年？　ああ、あの男は、ここに来る前にいた冴えない男か。

こんな非現実的な光景を見ても笑える度胸、さすが古参。

いつの間にか平静を保てる自分がいた。

危機が去ったという安心が心にゆとりを持たせてくれる。

「さて。そろそろ彼らも近づいてきたので、お手持ちの手袋から武器を呼び出してください」

その声でそこら中から、ハンドガンやら、SVDだとか、見事にバラバラの音が聞こえてきた。

俺も自分の手袋に向かって声を発する。

「AK-47」

サバイバルゲームやシューティングゲームにも馴染みのある名称を言った。

手袋の上につきりとした感触と、見慣れたフォルムのアサルトライフルが姿を現した。

「うわぁ」

感動と興奮で胸が高鳴った。

今まさに、憧れの銃を手にしたという実感は、心の中にくすぐったさと呼ぶ。

サバゲー好きなら尚更だ。

「たっ、くん……」

冬子のこらえたような声が聞こえた。

見ると、やたらにデカい銃を両手で持っている。マシンガンだろうか。

普段は腰に据えるタイプの物で、撃てる数と威力も大きいけど、その分だけ重量と反動も大きい。

「冬子、それ止めといったら?」

「うん……そ、そうする」

そう言っママシンガンを地面に落とした。

「ふう……。なにがいいのかなあ。こういうのさっぱり分らないし……」

「ハンドガンか、サブマシンガンにした方がいいね。軽いし扱いやすいよ」

あーあ、何言ってんだかな俺。

今から始まるのは死ぬこともある本物のサバイバルゲームなんだ。こんな呑気に会話するような状況じゃないのに。

「じゃ、サブマシンガン！」

その声と同時に、銃身が横に短く縦に長い銃が現れる。

「M10か。これもお馴染みだね」

「へえ、そんな名前なのね」

「うん。どのゲームでも扱いやすい仕様だし、コンパクトだから持ち運びも便利なんだよ」

「こ、コンパクト？ 確かに小さいけど……、これも重いよ……」

「銃ってたいがい重いよ？ なんなら、ハンドガンにする？」

「ううん、いい」

そう言っマ、冬子はやせ我慢をしながら首を横に何度も振った。かく言っ俺もやせ我慢している。

「さあ皆さん……」



主催者が声を裏返させて叫んだ。

「スタートです！ 三日間生き延び、幸せの袋を手に入れた者は現実世界で億万長者にも、大企業の社長にだってなり放題！！」

ちと大袈裟な気もするが、なんだかワクワクしてきた。

そのワクワク感はきっと、まだこの現実を受け止めきれないからなんだろう。

主催者の持つMK22が甲高く鳴り響くのを合図に、その場にいる全員が散り散りに駆け出した。

……。

「サンタ、か」

桜庭琢磨と冬子は東京タワーの見える方向へと行った。先の言葉は、二人と同じ方向に付いてきた男の言葉だ。

「君ら、カップルかい？」

その男が声をかけてきた。

随分な余裕だな、と思うと同時に照れた。

「ええ、まあ」

「そうか。なら、彼女のことは死んでも守りぬけ」

「は、はい！」

「ふっ。そうだ、名前を覚えておこうか。オレは和田孝治<sup>わた こうじ</sup>」

「桜庭琢磨です。彼女が、北川冬子」

自己紹介をすると、冬子が頭を下げ、孝治も頭を下げた。

「ま、名前なんか知ってても助けてやれないがな」

笑って言う孝治に、俺もつられて笑う。

「俺だって、助けられるほど余裕があるか分かりませんよ」

ニヒヒ、と笑い合っていると、孝治が口に入差し指をあて、「しっ」と言った。

口をつぐむと同時に、辺りを警戒する。

キョロキョロと視線を飛ばしていると、空に一つの影が見えた。

「あれがサンタか」

孝治も気づいたらしい。

よく目をこらして見ると、トナカイがソリを引っ張っていて、そのソリにサンタが乗っている。

「かあ……。絵本通りの格好なんだな」

まさにそれだ。

赤い服に赤い帽子。白い髭は生えていないが、一目でそれがサンタと分かった。

「ここからなら撃ち落とせー」

孝治は言いかけて、途中で止めた。

「そこか!!」

そして何も見えない暗闇に向かって引き金を引いた。  
何かに当たった反応は無かったが、すぐに何かが飛び出してくる。

「トナカイか!!」

立派な角を生やしたトナカイがこちらに迫ってきたのだ。  
そのトナカイの後ろで数人のサンタがこちらに歩いてくる。  
サンタはいつもこいつも大きな袋を背負っている。

「撃て!!」

孝治の言葉で引き金を引く。

だが、どの弾もトナカイに当たり、奥まで届かない。  
弾丸を何発も受けたトナカイは、少しグラグラと揺れた後、ぱたりと倒れた。

「よしっ!!」

俺がガッツポーズを取るのもつかの間、数人いるサンタの一人が  
小石を蹴った。

「がっ……!!」

その小石は目にも止まらぬ速さで俺のAK-47に当たる。  
なんとか手放さずに済んだが、手がヒリヒリと痛い。

「当たれ、当たれ!!」

冬子はいつの間にかM10からAK-47に持ち替えていた。そして、ちょうどいい段差にAK-47を置いて構えている。固定砲台か、考えたな。

「はええっ！」

銃口を合わせて撃つが、相手は弾丸以上の速さで横に避けて近づいてくる。

ゲームの経験なんて意味が無い。  
苦渋で顔が歪んだ。

「またトナカイが来たぞ！！」

冬子を真似して、孝治はマシンガンを段差に置いて撃っている。  
現れたトナカイは完全に武装していた。体中に金属の装甲を貼り付け、肌が見えない。

「ほお。こんなところにいたか、トップヘブン」

ゾクッ、と嫌な感じがした。

その声はマシンガンの銃声よりも体に響いてくる。

「探したぞ」

数人のサンタの後ろに、明らかな他との違いを強調する気配を身にまとったサンタが現れた。

そのサンタは胸元のチャックを開けて、中のシャツがぴっちり張り付いている。そのせいでいくつにも割れた腹筋が露わになっていた。腕も太く、筋肉隆々という言葉が何より似合いそうだ。

「か、幹部!？」

背後から声が聞こえた。

とっさに振り向くと、同じく筋肉のある男が驚いた顔のまま固まっていた。その体には、右腕が無い。

「ほお。お前は去年、わたしが腕をもぎ取った男じゃないか」

「て、テメエ……!!」

忌々しげな声のあと、背後の男は俺の横に陣取り、片手でサブマシンガンを構えた。

「ここで右腕の借り、返させてもらっぜ……!!」

「無様に逃げ帰った愚か者が何を言うか」

男はためらいなく引き金を引いた。

耳をつんざく高温の後、銃弾が全て筋肉のサンタへと当たった。しかし、当たっただけだった。

「無駄だ」

そのサンタは体に傷一つ付いてはいなかった。服にすら、銃弾の跡は無い。

「ぐっ、あああああっ!!」

男は引き金を引き続ける。

だが、それでもまだ迫ってくる。

「早く撃て!! 逃すな!!」

男が俺に振り向いて叫んだ。  
だけど、腕が震えて仕方ない。  
恐怖か？

全くダメージの無い相手への恐怖か？

「おい、新人！！ ボサツとしてんじゃねえ！！ 幸せは分けてやらねえからな！！」  
「は、はいい！」

そう。

ここまでが事の成り行きだ。

ここはお前たちの知る現実じゃない（後書き）

天使に人々の作り出した利器は通用しない。

いや、それは極一部か。

天使の中でも幹部と呼ばれるふざけた奴らが正にそれだ。  
奴らに銃弾は効かない。

逃げるのが最善の選択なのさ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7162y/>

---

俺たちのクリスマスは戦場でした

2011年11月29日22時46分発行